

茨城高等学校・中学校

校長室だより 2025年10月10日

読書ノススメ/深く考える力を育てる

『ごんぎつね』は新美南吉によって書かれた児童文学です。

村はずれに住む小ぎつね「ごん」はいたずら好きで、しょっちゅう村へ出てきてはいたずらばかりしています。ある日、村の百姓の兵十が川でウナギを捕っているのを見たごんは、いたずらを思いつき、びくの中の魚やウナギを皆逃がしてしまいます。それから十日ほどして、ごんが兵十の家の前を通りかかると、兵十の母親の葬式が営まれていました。ああ、あのウナギは兵十が病気の母親に食べさせようとしていたのだなあ、そうと知っていたらあんないたずらしなかったのに、と後悔したごんは、罪滅ぼしに兵十の家に栗や松茸などを採って届けるようになります。そうとは知らない兵十は、不思議なこともあるものだ、いったい誰が栗や松茸を届けてくれるのだろう、と首をかしげるのでした。ある日、兵十はごんがこっそりと家の中に入ってきて来るのを目にします。さては、いつかウナギを逃がしたいはずら狐がまた悪さをしに来たのだな、と考えた兵十は、そっと火縄銃に火薬を詰めて、ねらいをさだめてごんを撃ちました。ぱたりと倒れたごんに兵十が近寄ってみると、そこには栗がかためて置いてあるではないですか。驚いた兵十が「ごん、お前だったのか」とたずねると、ごんはぐったりと目をつぶったまうなずくのでした。

『ごんぎつね』は小学校の国語の教科書では定番の教材で、おそらく誰もが一度は読んだことがある作品だと思います。

この『ごんぎつね』に関して、ちょっとショッキングな本に出会いました。『ルポ/誰が国語力を殺すのか』石井光太著(文藝春秋)です。何がショッキングかという、石井さんが講演会で訪れたある小学校で目にした四年生の国語の授業での出来事です。その授業ではちょうど『ごんぎつね』が扱われていました。問題となったのは兵十の母親の葬式の場面で、「よそいきの着物を着て、腰に手拭いをさげたりした女たちが、表のかまどで火をたいています。大きな鍋なべの中では、何かぐずぐず煮えていました」という描写です。あれこれ説明するより手っ取り早く、石井さんの文書をそのまま引用します。

小学四年生の教室の後方から授業を見ていたところ、生徒の間から耳を疑うような発言が飛び交いだした。

「この話の場面は、死んだお母さんをお鍋に入れて消毒しているところだと思います」

「私たちの班の意見は違います。もう死んでいるお母さんを消毒しても意味がないです。それより、昔はお墓がなかったのです、死んだ人は燃やす代わりにお湯で煮て骨にしていたんだと思います」

「昔もお墓はあったはずですよ。だってうちのおばあちゃんのお墓はあるから。でも、昔は焼くところ

(火葬場)がないから、お湯で溶かして骨にしてから、お墓に埋めなければならなかったんだと思います」

「うちの班も同じです。死体をそのままにしたらばい菌とかすごいから、煮て骨にして土に埋めたんだと思います」

スプラッター系サイコホラー映画かよ、怖すぎだろ？と思わずツツコミを入れたくなった人もいると思いますが、小学生たちは別にふざけていたわけではありません。大真面目に議論をしています。ちなみに鍋の中でぐつぐつ煮られていたものは野菜や油揚げなどの煮物です。ちょっと前の時代まで、葬式は自宅で行われるのが普通で、参列者には煮物やお酒などが振る舞われていたのです。

まあ確かに、核家族化が進んだ日常の中で人の死に触れる機会が減少し、まして自宅で葬式を行うことがほとんどなくなった現代、昔ながらの葬式の風景が小学生に正確に理解できなかったという点は考慮しなければならないかもしれません。しかし、いくつかの誤読の原因が想定されるにしても、『ごんぎつね』という作品の文脈全体から判断して、母親の死体を煮ていたという読解はありえない、と考えるのが普通でしょう。なぜ小学生たちはこんな誤読をしてしまったのでしょうか？

この点について、『ルポ/誰が国語力を殺すのか』には、この小学校の校長先生の談話が紹介されていました。「こうした子たちに何が欠けているのかといえば、読解力以前の基礎的な能力なのです。登場人物の気持ちを想像する力とか、別のことを結びつけて考える力とか、物語の背景を思い描く力などです。自分の考えを客観視する批判的思考もそうでしょう。それらの力が不足しているから、常識に照らし合わせればとんでもないような発想をしているのに気づかず、手を挙げて平然と答えられてしまう。読解力の有無で済ましてはいけないことだと思うのです」

研究者や文科省などが、子どもの読書離れ、活字離れを問題視する発言を、私たちはたびたび耳にしています。しかし、『ルポ/誰が国語力を殺すのか』著者の石井さんは、小学生たちの誤読は単なる読解力の問題ではなく、もっと根本的な国語力の不足に起因するものだ、と述べています。子どもたちの国語力の低下はなぜ生じたのか？石井さんは、それを家庭環境でのつまづき、ゆとり教育と脱ゆとり後の教育の多様化、ネットやSNSなどの影響などさまざまな原因を想定し、検証しています。

一つの物事にじっくりと向き合い、そこから何かを感じ取ったり背景を想像したり、自分の思考を磨き上げていくのが国語力です。石井さんは、そもそも国語力とは何かという問題提起に対して、語彙力、情緒力・想像力、論理的思考力の三つに分類して説明しています。

どれくらい言葉を知っているかという語彙力は国語力の土台です。一般的には人は十二歳くらいまでに約二万語を覚えるとされており、日常生活で主につかうのは三千語程度といわれています。情緒力は、「他者や自然から美しさ、悲しみ、もののあわれを感じ取り、理解する能力」、想像力は、「未知のものをイメージしたり、他者の表情や動きから言外の感情を読み取ったりする能力」と説明されています。情緒力や想像力は語彙力と密接に結びついています。物事の細部を感じ取ったり、他人の立場に立って状況やその気持ちを読み取るためには、豊富な言葉が必要になります。例えば不快な感情を「うざい」と一言で済ませてしまう人は、「わずらわしくて面倒だ」「思いやりがなく嫌な感じだ」「うっとうしくて気が滅入る」「^{さわ}気に障ってイライラする」などといった多彩な言葉が持つ意味をイメージできず、結果として自分の感情や相手の心の細

やかな動きも知覚できない、という事態に陥っていきます。

論理的思考力は、子供たちがある程度の年齢になり、家族と距離を置いて、学校など異なる人たちの集団に身を置くときに必要となります。多様な価値観にもとづく相手の主張を文脈の中で理解し、自分の意見を筋道立てて組み立てる能力です。

国語力はよりよく生きるための全人的な力だ、と石井さんは言います。「私が思うに国語力とは、社会という荒波に向かって漕ぎ出すのに必要な“心の船”だ。語彙という名の燃料によって、情緒力、想像力、論理的思考力をフル回転させ、適切な方向にコントロールするからこそ大海を渡ることができる」。そして、この国語力不足の問題が、いじめや不登校、ゲーム依存や非行など、子どもたちの様々な問題の根っこに存在していると『ルポ/誰が国語力を殺すのか』は述べています。

三十数年間、国語教師として教壇に立ってきた筆者は、『ルポ/誰が国語力を殺すのか』を読みすすめる中で、何度も本を伏せて「う～む」と考え込んでしまいました。この本に書かれている内容が、自分が教師としての体験の中で感じていたこと、考えていたことと重なる点が非常に多かったからです。

例えば、言葉で説明することの苦手な生徒の存在について。授業中、「主人公のこの発言から、どんな気持ちを読み取れると思う？」とか「このように筆者が主張する理由は何かな？」など質問をすると、ひたすら貝のように黙り込んでしまう生徒がいました。人前で話すのに気後れする、とんちんかんな回答をしたら恥ずかしい、といった理由も当然あるのでしょう。しかし、それよりも「言葉で自分の思いを表現する」こと自体に大きなハードルが存在しているように感じました。言葉を文章にすることができず、単語でしか答えられない生徒もいました。昔から、言葉で説明することの苦手な生徒は一定数存在しました。その数は徐々に増え続け、近年ではそれが珍しいことではなくなってきたように感じます。

国語力低下は、文章で表現する力にも如実に表れます。例えば、夏休みの宿題の読書感想文、君はどんなふうに書いていますが。これもあくまで個人的な肌感覚ですが、以前は、提出された読書感想文を読んでいると、矛盾や飛躍はもちろんあるけれど、それでも自分の思いを言葉にしようと悪戦苦闘したことがわかる文章が、毎年、それなりにあったように記憶しています。それがいつのころからか、ひたすら本のあらすじを書いて原稿用紙を埋める感想文が増えてきました。現代文のテストでも、解答を記述式で求める問題を出すと、何も書かずに（書けずに？）まっさらの解答欄のまま提出してくる生徒の割合も増加したように思えます。こうした国語力の低下は、必ずしも学業成績と比例するわけではなく、偏差値 40 の生徒にも偏差値 70 の生徒の中にも見られる現象です。

それではこのような国語力の低下を食い止め、改善するにはどうしたらよいか？石井さんはその対策をいくつかあげていますが、ここではその中の一つ、「読書」に注目したいと思います。

『ルポ/誰が国語力を殺すのか』では、国語力育成の実践例として神奈川県にある私立の女子中高一貫校の取り組みを紹介しています。その学校では、文庫本一冊を一学期間かけて精読する国語の授業を行っています。石井さんが見学したのは中学2年生の『アンネの日記』（注）を教材にした授業でした。その日、その教室では「はじめてのキス」の章がとりあげられていました。ユダヤ人であるアンネの一家は、ナチスの迫害を逃れ、アムステルダム運河に面した隠れ

家で、ファン・ダーン夫妻とその息子ペーターらとともに生活しています。「はじめてのキス」の章には、14歳のアンネが3歳年上のペーターに抱き寄せられ、はじめてキスしたときの心のときめきがかかれています。アンネはこの上ない幸福感を感じるとともに、このことを両親に告げるべきかどうか、この関係を続けたら男性であるペーターはそれ以上のことを求めてくるのではないかなどと考え、恋に思い悩みます。以下、また『ルポ/誰が国語力を殺すのか』から抜粋します。

この授業でこの箇所を読ませる意味とは何だろう。私が見ていると教員は生徒たちに語りかけた。

「みなさんにとっては少し刺激的な描写かもしれませんが、次の一節を読んでみましょう。〈わたしたちはここにとじこめられて暮らしている。世間から切り離され、とりわけ最近、恐怖と不安のなかにだけ生きている。なのにどうしてわたしたち愛しあっている同士が、そこまで控えめにふるまわなきゃいけないんでしょう。どうしてキスしあっちゃいけないんでしょう〉とあります。もう一度考えてください。アンネとみなさんは同じ年齢ですが、置かれている状況はまったく違いますね。それについて、みなさんはどう感じますか」

女性教員は、単にアンネが恋をしている事実だけを伝えようとしているわけではない。わずか十四歳の少女が、隠れ家で迫りくる死の恐怖と闘い、恋をする自由さえ許されない不条理な社会のあり方について考えさせているのだ。

…中略…

私が教室の後ろで聞き入っていると、教員は生徒たちがタブレットを通して送ってきた文章をスクリーンに映した。そこには次のように記されている。

〈アンネは日記を通して自分を知り、成長させている。日記に書いたことは、どんなに嫌な自分でも消さないし、「ユダヤ人でなかったら」などと言って自分を否定しない。日記を読み返し自分を変えようと努力する。しかし、自分を客観的に厳しく観ようとするため、理解者がいないと孤独を感じてしまう。だから、日記を書くことで、自分の話を聞いてくれる本当の友達を作ろうとしたのだと思う。日記の中でアンネは夢と希望を持ちつづけ、「勇気を持ちましょう」と自分に言い聞かせるようにも書いている。アンネは、ユダヤ人であること、女性であることに誇りを持ち、「アンネ・フランク」という存在として生き続けている〉(一部省略)

教員はスクリーンに映された文章を一つひとつ見ていきながら、思考力や表現力が秀でていられると思われる箇所に下線を引いて良かったと感じる理由を説明し、他の生徒にも意見を募る。この課題には、通常の国語のテストにあるような正解はない。生徒が何を感じ、どこまで考え、自分の言葉でまとめられたかが評価基準なのだ。

アンネの日記を読んだ中学2年生の女子生徒の文章は、うわべだけ整えた美辞麗句^{びじれいく}ではありません。この女子生徒が、今、十四歳として生きる自分のすべてでアンネの言葉を受け止め、共感や批判や想像の過程を経て発せられた、生きて躍動することばです。『ルポ/誰が国語力を殺すのか』には、この学校の校長先生のことばも紹介されています。「本校が国語科においてとりわけ文学作品を重視しているのは、人間にとって根源的な力を養うのに最適だと考えているからです。フィクションでもノンフィクションでも、優れた作品は、生徒の中にあるやさしさ、想像力、忍耐力といったものを育ててくれます。それが生徒の人としての力を総合的に成長させていくと考えています」

優れた文学作品を読むことが、ものごとの本質をとらえ、深く考える力を育むことは、人間が歩んできた知の歴史が証明するところです。読書とは、作者や、作者のアバターといえる作中人物の思考や感情を自分の中に再現する経験です。夏目漱石の『こころ』を読む人は、「先生」の「お嬢さん」に対するほのかな恋心が、「K」というライバルの出現によって強い独占欲へと変わっていく過程を自らのものとし、友情を裏切ることへの罪悪感、「K」の自殺という取り返しのつかない結末を招いた運命への恐怖を追体験することになります。村上春樹の『海辺のカフカ』を読む人は、父を殺し母と交わるというオイディプス王を想起させる呪いを負ったカフカ少年の心の闇と、自分とは何者なのかという問いをめぐる葛藤を共有し、ネコとの会話ができるナカムラさんと不思議な使命を帯びた旅をともにするのです。

このような深い読書の体験は、語彙の塊^{かたまり}を長大な文脈の中で意味づける作業を通じて、読者を物語に没入させ、微細な情緒を感じ取り、豊かな想像力を巡らせる心のひだを育てます。積み重なった読書体験は、読者に考えることをうながし、ロジカルな思考の道筋を示すようになります。国語力、すなわち人間が生きるための根源的な能力を育むにあたって、読書が果たす役割は非常に大きいといえるでしょう。

『ごんぎつね』に話を戻します。「大村はま」(だったと思うが違っていたらゴメン)という国語教育の研究者が、朗読劇を取り入れた『ごんぎつね』の授業実践について書いています。前述のように、作品の最後に「ごん、お前だったのか」という兵十のセリフがあるのですが、初読のときと、授業で『ごんぎつね』を精読した後では、子どもたちの「ごん！」という呼びかけがまったく違った響きを持つ、という話を読んで感動した記憶があります。これなども、読書が子どもたちの国語力を豊かに成長させた例といえるでしょう。

読書の秋がやってきました。かつて「書を捨てて、町に出よう」と言った詩人がいました。しかし、筆者は君たちに「書を携^{たずさ}えて、町に出よう」と伝えたいと思います。本を読もう。そして人と人とのつながりの中で生きていこう。読書によって育まれた豊かな国語力は、君の前にあらわれるさまざまな問いについて深く考える能力をもたらし、もののあわれに心動かす感性を育て、論理的で明晰な思考を導き、君の人生を彩り豊かなものにしてくれるはずです。この秋、君が人生の礎石となるような一冊と出会えることを願っています。

【おまけのスピノフ】

上の文章を読んでくれた生徒諸君の中には、「そんなこと、急にいわれても～。オラ～、いままで本なんか読んだことなんてないぞ～お」という野原しんのすけタイプの人もあるかもしれません。そんな、何を読んだらいいか分からないという君のために、いくつかアドバイスをしてみたいと思います。あくまで私見です。

①そそられるタイトルの本と出会う

普段本を読む習慣のない人には、まず本屋さんか図書館に足を運ぶことを勧めます。そして、たくさんある本棚の間をゆっくり歩きながら、「あ、この本おもしろそう」と思えるタイトルの本を探してください。国語力を養うという観点からは、ひとまずマンガとライトノベルは除外した方がいいと思います。それ以外なら別におかたい本である必要はありません。ミステリーでも、ビジネス本

でも、お笑い芸人のエッセイでもかまいません。そそられるタイトルの本に出会えたら、手に取ってパラパラと読んでみましょう。裏表紙の作品紹介文を参考にするのもいいですね。

タイトルで本を選んだ結果、読んでみたらイメージと全然違って失敗！というケースももちろんあるでしょう。しかし、それまで読まず嫌いしていた本と運命の出会いをすることもあるはずで

②興味ある分野の本を読む

スポーツ、アニメ、食べ物など、自分の興味のある分野で本を探してみる、というのも一つです。歴史に興味のある人は歴史小説、すてきな恋にあこがれる人は恋愛小説なんかもいいですね。自分の例で言うと、学生時代にテニスをやっていた流れで『テニスボーイの憂鬱』^{ゆううつ}を読んで、村上龍という作家に出会いました。

これはどんな本でもそうですが、「おもしろそうだな」と思って読み始めたけれど、どうにもこうにもおもしろくないという本に当たってしまう場合もあります。そんなときはスバツと読むのをやめて、次の本にいった方がいいと思います。おもしろくない本を無理して読んでも、あまり得られるものはないからです。ただし、難しそうだから読むのを止めようというのはちょっと待ってください。「おもしろくない」と「難しい」は全然違います。君の国語力を最も伸ばしてくれるのは、読んでみて少し難しいかな？と感じる本です。「ちょっと難しいけどおもしろい」本に出会えたらベストです。

③とりあえずベストセラーになっている本を読んでみる

えっ、そんなミーハーなことでもいいんですか？という声が聞こえてきそうな気がしますが、いいんです！と断言したい。人によって何をおもしろいと思うかは確かに違うけれど、ベストセラーになる本というのは、多くの人におもしろいと感じさせる何か、最大公約数的なおもしろさを持っているものです。書店によっては、売れている本をランキング化して店内に掲示しているところもあります。読んでみておもしろかったら、同じ作者の別の作品を読んでもいいし、同じジャンルのおもしろそうな作品を探してみるのもいいでしょう。

こんなこと書いててなんですが、筆者はふだん流行っている、いないにあまり関係なく本を選ぶタイプなのですが、少し前、『成瀬は天下を取りに行く』という本がすごくおもしろくてベストセラーになっているという書評を見て、「ほな読んでみたらか？」というノリで読んでみたら、おーなるほどおもしろいじゃん？となりました。何を読んだらいいかわからなかったら、まずとりあえず流行りに乗ってみる、という手は「あり」だと思います。（終）

注)『アンネの日記』

アンネ・フランク著。ユダヤ人であったアンネ・フランクの家族は、ナチスの迫害を逃れドイツからオランダのアムステルダムに移り住み、1942年から隠れ家での生活に入る。13歳の誕生日に日記帳をプレゼントされたアンネが、13歳から15歳にかけて隠れ家生活を送りながら書いた日記が『アンネの日記』である。アンネは日記に「キティー」と名付け、「親愛なるキティーへ」という呼びかけから始まる手紙のような文体で日記は書かれている。15歳のアンネは密告によってナチスに連行され、強制収容所で命を落とすが、戦後、家族でただ一人生き残った父親によって『アンネの日記』が出版された。

※「校長室だより」は、本校のHPにも掲載しています。バックナンバーを読みたい人は、HPの「学校案内」→「校長室だより」からどうぞ。